

佳作

## 父が教えてくれたこと

鹿児島県 鹿児島県立鹿児島中央高等学校二年 帖佐 菜甫

私の父は今、県外で単身赴任をされており、今年で二年目だ。普段は母と妹と暮らしているので、父に会えるのは年に数回だ。父は多くを語る人ではない。電話をして、「元気か」「部活はどうだ」と短いやりとりで終わることが多い。それでも、帰省した時には必ず、「寂しいなあ。帰りたくないなあ。」

とつぶやく。長期休み、私たちが遊びに行った時も、普段は強がって寂しさを見せない父が、別れ際に私たちの姿が見えなくなるまで手を振る姿を見ると、胸が熱くなり、涙がこぼれそうになる。言葉以上に、父の家族への想いが伝わる瞬間だ。

そんな父は、私の背中を押してくれる大きな存在だ。私は陸上部に所属しており、インターハイ出場という目標に向かい、日々汗を流した。特に力を入れてきた四×四〇メートルリレーにおいて、南九州総体で惜しくも六位までの出場権に届かず、七位で涙を飲んだ。次の私たちの目標は翌月に行われる県選手権での優勝だった。気持ちを切り替え、また練習に励んだ。大会が一週間後

と迫り、私たちもより一層気合いが入ってきた中、私はけがをしてしまった。この大会は先輩方の引退レースであり、大好きな先輩とバトンをつなげる最後の舞台。何より、あの南九州総体の悔しさのまま終われない。絶対に走りたいたいという気持ちの半面、今の私が走れば、メンバーに迷惑をかけてしまうかもしれないという焦りと不安で胸がいっぱいだった。

そのとき、母が父に電話をして私の状況を伝えてくれたらしい。父はこう言ったという。「高校生の俺だったら、きっと走ってるな。だから俺には走るなって止める権利はないな。」

さらに、母は父が若い頃の経験を私に教えてくれた。今から十六年前、父は柔道をしていて、腰の状態が悪かったにも関わらず、県選手権に出場し、九州選手権への切符を手にした。しかし、腰の状態は悪くなる一方で、歩くのも足がしびれていたそうだ。九州選手権へ会場入りはしたものの、柔道会の先生方に止められて、結局出場は叶わなかった。その夜、父は涙を流したらしい。それでも父は、

「後悔はしていない。」  
と言ったという。

母からこの話を聞いたとき、私は胸が熱くなった。父が本気で挑戦したからこそ、結果がどうであれ、「後悔はしていない」と言えるのであろう。だから、父は私に「菜甫が後悔しないように、自分で決めればいい」と伝

えてくれたのだと思う。

私は悩み抜いた末に走らないことを決めた。走りたい気持ちは最後の最後まで消えなかった。それでも、無理をして仲間に迷惑をかけるより、チームの力を信じ、応援する、新人戦に向け、今は我慢するという選択をした。走れなかった悔しさは今でも残っている。それでも私は、この決断を後悔していない。父と同じように、自分で選び、自分で受け止めたからだ。

責任感が強く、真面目で負けず嫌いな父の性格は、私にも確実に受け継がれている。高校、大学時代の父は柔道部のキャプテンで、私も今、陸上部のキャプテンとして仲間をまとめる立場にある。壁にぶつかったときや、伸び悩んだときは父に相談するときに来るかもしれない。遠く離れて暮らす父は普段は多くを語らないけれど、私の背中を押す言葉をくれるだろう。実際、母を通して届いた言葉や、父の十六年前の経験は、今の私に大きな勇気をくれた。父が教えてくれたのは、強さと優しさ、そして「後悔のない生き方」だった。

これからも私は陸上を続ける。いつか父のように、胸を張って挑戦を語れるようになりたい。そして、たとえ思い通りにならなくても、「後悔はしていない」と言える人間でありたい。結果が全てではない。挑戦する気持ちを持ち続け、仲間や家族を大切にすることが本当の成長だと思う。どんな状況でも諦めず、自分の信じる道を進む勇気を持ち続けたい。父の大きな背中を思い出すた

びにどんな困難も乗り越えられる気がする。父に胸を張って、「後悔のない競技人生でした」と感謝の言葉が伝えられる日まで、私は走り続ける。